

なぜ「学び直し」？

立田 慶裕

筆者は、大学で20代の学生数十名を対象にした講義で、新しい学習指導要領での小学校へのプログラミング教育の導入や英語教育の必修化を取り上げた。その動画を見た学生の感想である。

「小学生がICT活用しているときにタブレットを使用していて驚いた。私が高校のときでさえパソコンだったのに時代は進んでいるなと思った。また、英語に関しても、私が小学校6年生でしていたことを小学3年生でできていて驚いた。生活の中で使える英語を習うことから、日常生活や会話で使える英語が話せる小学生が増えてくると考えたらすごいと思った。それに負けずに自分も英語で会話ができるようにスキルを上げていかなければならないと思った」。

日常生活の中では、社会の変化をニュースで知るとしても、最近の学生は新聞を読まないし、テレビも見ない。現実の社会変化から10年後の世代がどうなるかを知っておくことは、教師をめざす学生の素養となる。実際、30代から50代の教員を対象とした教員免許更新講習の講師を担当した際に驚く点は、学校教育終了後の知識や技術がずっと変化せず、新たな知識や技能を特に学ばなくてもいいと思う人が多いことである。しかし、学習の意欲がないかといえ、そうではない。

内閣府政府広報室が行った「生涯学習に関する世論調査」(平成30年)によると、「あなたは、この1年間くらいの間に、どのような場所や形態で学習をしたことがありますか(n=1710人)」との問いに対し、「ある」という回答が58.4%、「ない」という回答は、41.3%であった。「ない」という回答者に対しての問い、学習しなかった理由では、「仕事が忙しくて時間がない」(33.4%)や「特に必要がない」(31.1%)が多い。ただ、学習しなかった人でも「これから学習するとすればどのようなことを学習したいですか」との問いに

は、「学習したい」という回答が82.3%であった。たとえ、この1年間に学習しなくても、8割以上の人々は、時間と機会さえあれば学習したいと望んでいる。

ただ、学習への意欲において、前述の急激な社会変化に応じた必要性や金銭的報酬に応じた学習は、自分が必要と感じなければ学習したいと思わないだろう。

「学び直し」は、金銭的動機付けより、内発的動機付けが重要である。ダニエル・ピンクは、動機付けに必要な要素が、自律性(autonomy)、習得(mastery)と目的(purpose)の3点にあるという。自律性とは、内発的動機付けであり、そこに自己による決定と選択の自由の要素がふくまれていること、決して人から押しつけられないことが重要としている。自律性という意味には、自分のためだけの学習ではなく人との関係の中で、個人主義ではない相互依存性を含むものをいう。習得とは、物事をもっとうまく成し遂げたいという欲求である。たとえ、一歩ずつでも、年齢に関わらずいろいろな学びを日常生活に習慣づけ、継続して成長することが動機付けにつながる。

21世紀を生きる力として経済協力開発機構が提案した概念「キー・コンピテンシー」でも、3つの力として異質な集団で交流する力や道具を相互作用的に用いる力とともに、自律的に活動する力が重視されている。自律的活動力には、大きな展望の中で活動する能力と人生計画や個人的活動を設計し実行する能力が含まれる。自らの権利やニーズを表明する能力でもある。

「学び直し」も、自分の心から始まる。秋元康さんの『きっかけ』という曲の一節に、次の言葉がある。「決心のきっかけは理屈ではなくて、いつだってこの胸の衝動から始まる」。

(たつた・よしひろ 神戸学院大学人文学部教授)